

南北朝期における土岐氏の在京活動

格 和 賢

はじめに

室町幕府の守護研究については、守護領国制論的な見方が長く影響をおよぼしてきたが、川岡勉氏により、守護が幕府権力の構成要素として、在京し幕政に参与する面に対しても焦点があてられるようになった。^②さらに吉田賢司氏が川岡氏の立論を受け、在京し幕政に参与する守護を、その他の在国守護とあわせて一律に守護としてとらえるのではなく、「在京大名」として区別してとらえるべきとの見解を示している。^③

南北朝期における大名の在京という点に着目したのが山田徹氏の研究である。南北朝期の守護家の重要人物の在京徴証を整理し、以下の点を明らかにしている。まず観応の擾乱にともなう軍事的要因から守護が在国する事例は増加するが、戦乱が終息すると室町期に見られる在京守護家の人物が恒常的に在京するようになる。そして南北朝期の段階では、在京守護家が常に在京するまでには至っておらず、それが本格的に固定化するのには、応永年間になってからであった。また守護家中の役割分担としては、基本的に当主が在京し、子弟は在国する形が主流であったが、軍事的要因により地方へ発向する必要が生じたり、幕府中央の政変などにより没落したりすると、当主が在国して子弟が在

京する場合も生じたとされる。さらに守護家の在京について、「家を代表して武家社会に参加する性格を持つ」と述べられており、先に述べた当該期主流であった当主が在京し子弟が在国するという一族配置は、守護家が京都在住と政権参加を重視したものであったと指摘している。実際に彼らの守護職や所領をめぐる争いは京都で行われており、京都での政権参加を基盤とした権力形成を志向したと論じている。^④

このように、大名にとって在京という行為がいかに重要であったかという点、また在京を重視した理由は、幕政への参与を基盤とした自己の権力編成であったという点などが明らかとなっている。そして南北朝期は、室町期にかけて守護の在京が定着していく過渡期と位置づけられよう。以上のように、大名の在京についての全体像は明らかにされてきているものの、南北朝期における各大名の在京活動の実態についてはいまだ不明な点も多く、個別事例に則した検討をさらに積み重ねる必要があると考える。

そこで本稿で検討対象としたいのは土岐氏である。同氏については古くから南北朝期の室町幕府政治史において重視されてきたが、三管領家の研究に比べると研究蓄積はそれほど多くはない。だが、谷口研語氏の総体的な研究をはじめとしてその後も着実に重ねられている。^⑦さらに近年では、土岐頼康を中心に、南北朝期の幕府内における土岐氏の重要性、強固な権力基盤が明らかにされている。^⑧ところが、土岐頼康に限らない、他の一族や関係者を含めた土岐氏の在京活動に関しては、いまだ検討の余地を残していると考ええる。例えば、土岐頼康の弟であり、侍所頭人を務めた土岐直氏に関しては、侍所頭人としての活動に触れているものはあるが、史料制約からかその他のことについてはあまり深く言及されていない。^⑩

したがって本稿では、土岐頼康期における土岐氏の在京活動について検討を加える。土岐氏は軍事的・政治的要因から当主の頼康の在京・在国が入れ替わる頻度が多く、^⑪かつ在国の期間も長期間にわたる。そのため、頼康の恒常的な在京が始まった貞治年間から応安三年（一三七〇）の土岐頼康下国までの時期を対象とし、^⑫当主の土岐頼康のみならず、舍弟や被官についても着目する。具体的には、將軍への奉仕及び京都代官という役職を中心に検討していく。

史料制約は大きい、南北朝期における土岐氏の在京活動の実態について究明し、土岐氏の在京活動の特徴を明らかにしたい。

第一章 当主土岐頼康の在京活動

本章では、まず当主である土岐頼康について考えていきたい。観応の擾乱以前の頼康の在京については、康永元年（一二三二）の美濃国守護補任以降いくつかの徴証が確認される。⁽¹³⁾ 観応の擾乱勃発後は、主に東海地方における尊氏・義詮方の主力として在京と在国を繰り返しており、各地を転戦して尊氏・義詮への忠節を尽くした。この点から、頼康は將軍から厚い信頼を得ていたと推察される。こうした前提のもと、頼康の在京活動について検討していく。

恒常的な在京は、貞治六年（一二三六）五月二十四日、足利基氏の弔いのため上洛したことより始まる。⁽¹⁵⁾ この後、將軍との関係を窺わせるものとして足利義詮の御成がある。將軍の御成に関しては先行研究でいくつかの指摘が見られる。まず室町期について、二木謙一氏は、將軍による歳首の大名邸御成は、將軍と大名との主従関係を密にする効果があったと述べている。⁽¹⁶⁾ 次に戦国期においては、浜口誠至氏が、將軍の大名邸御成は亭主側と將軍との親睦の深化や地位の喧伝に効果があつたと指摘している。⁽¹⁷⁾ これらの研究成果から読み取れるのは、御成をする將軍側にも、御成の対象となる側にも様々な利点があつたことである。南北朝期における將軍の御成についても同様に考えることができるだろう。

さて頼康の場合であるが、上洛から二か月たたない間に、次のような活動が見られる。『師守記』貞治六年七月三日条には、

三日、（中略）^(頭書)今日鎌倉前大納言被^(足利義詮)渡^(大)土岐大膳^(頼康)□夫人道光堂宿云々、有^(大)種々儲云々、

とある。この日、義詮が頼康の宿所光堂へ御成している。そこでは頼康による様々な饗応が行われたようである。

在国中であつた大名が上洛した直後に、將軍の御成の対象となることは他にも見られる。例えば、足利直冬を擁して南朝方に属していた山名氏の場合は、幕府方へ帰順した後、当主の山名時氏に先んじて子息の氏冬が上洛したが、その氏冬の邸宅へ義詮が御成している。⁽¹⁸⁾さらに『太平記』では、同じく直冬を擁していた大内弘世が、幕府への帰順後に銭貨や唐物をふるまつたと描かれている。⁽¹⁹⁾これらの例を踏まえれば、上洛後に將軍に対して何らかの饗応を働かせること自体は珍しくなかつた可能性が高い。

この約二か月後、『師守記』同年九月十一日条には、

十一日、(中略) 今日大樹被^(義詮)渡^レ賀茂^一、子息并室家同被^レ渡^レ之云々、大樹騎馬云々、是土岐大膳大夫入道招^(頼康)引^一之云々、

とある。これは、足利義詮が賀茂へ御成し、妻子も同行したという内容である。大名邸への御成というわけではないが、やはり頼康が義詮を招待している。先の七月の御成は、上洛直後に行われた御成であり、他にも類似の例が見られた。しかしその御成を終えた後も、頼康はこのような將軍を賀茂へ招待しているのである。

こうした御成について、頼康側の意図としては、まず將軍との親睦の深化が考えられる。さらには自らの地位の喧伝ということもあつたのではないか。南北朝期、幕府内における諸大名の勢力争いが頻発したことを踏まえると、大名間の力関係を意識し、諸大名へ自らの権勢を誇示し幕府内での立場を少しでも有利に持つていこうという意図が働いたことも考えられよう。また、將軍義詮側からしても、大名邸へ御成することは主従関係の確認、そして接待を受けることで將軍としての権威を誇示するなど、やはり利点があつたのであろう。

さらにこの九月の頼康の動きに関連して留意しておきたいことがある。『後愚昧記』貞治六年九月九日条には、

九日、(中略) 伝聞、此両三日細川右馬頭京著云々、如^(頼之)二世間謳歌^一者、此男可^レ為^レ武家執事^一之間、上洛云々、就^(時氏)之山名又鬱憤、天下之乱可^レ出来^一之由、有^レ巷説等^一、

とある。頼康が義詮を賀茂に招待したのとはほぼ同時期に、細川頼之が上洛しているのである。⁽²⁰⁾ この記述によると、頼之の上洛は前年の斯波氏失脚以来空席となっていた執事へ就任するためのものと見られており、これに対し山名時氏の「鬱憤」がうわさになるほどの政治的意味を有していた。この一大事と同時期に義詮を招いて接待するという頼康の行為も、やはり政治的な意図が少なからず働いていたのではないか。

なお、先に上洛直後の御成の事例として挙げた大内氏や山名氏については、幕府（尊氏・義詮）方にとって長く敵方であったという点にも注意しておく必要があると考える。頼康の場合は、同じく在国していたものの、一貫して尊氏・義詮方に属してきた。將軍との親睦を深めるという目的は同様であっても、これまで敵方であった人物による行為と、味方であった人物による行為とを同一視はできない。この頼康の招待による御成は、どのような背景により行われたものだったのだろうか。

この年義詮は三十七歳で死去し、義満が三代將軍となり、細川頼之が管領として幕政を主導する体制が始まる。この時期の頼康の動向、細川頼之との関係性についてはすでに山田徹氏によって明らかにされている。⁽²¹⁾ すなわち、頼康は評定衆に名を連ね、応安元年（一二三八）の延暦寺強訴の際は諸大名と対応を協議し、また内裏の警護に出動するなど、当初は幕府内で重要な地位を占めていた。しかし、北朝の皇位継承問題により細川頼之と対立を深めた結果、応安三年十二月に頼康は尾張国へ下向するのである。

この二人の関係性について、もう少し踏み込んだ考察を試みたい。『後愚昧記』応安元年八月二十八日条には、
廿八日、（中略）神興可_レ有_二入洛_一之由、自_二昨日_一風聞、訴訟事、於_二公家_一者、可_レ有_二裁許_一之、_{（細川）}叡慮也、仍連々以_二勅使_一雖_レ被_レ仰、武家執事武蔵守頼之・土岐大膳大夫人道善忠等不_レ可_レ有_二裁許_一之由、固以執_レ之、_{（頼康）}山名・赤松・佐々木等_一者、可_レ有_二裁断_一歟之旨、雖_レ出意見、執事違_二所存_一之間、不_レ及_二遵_一行之、仍満山含_二鬱憤_一、及_二神興入洛之儀_一云々、
_{（山名）}

とある。延暦寺の強訴への対応について諸大名が協議しているが、頼之と頼康のみが、他の大名らと異なる意見を主張している。その理由としては、頼康と春屋妙葩との親交がまず考えられるが、さらに頼康・頼之対その他多数となった構図から、この時点における頼康と頼之との間に明確な協力関係が築かれていたことを想定できないだろうか。⁽²³⁾

この両者の共通点として注目したいのは、山田氏が指摘する「観応擾乱期に在国して複数にわたる分国を有し、勢力を扶植し」ていたという点である。⁽²⁴⁾ これまで見てきたとおり、頼康と頼之はいずれも恒常的に在京を開始するのは貞治年間末になつてからであつた。他の守護に比べて長く在国していたことになり、その間、分国において勢力を扶植することができただろう。ただしこのことは、裏を返せば在京活動の経験が不足していたということを示すのではないか。長期間に在国し強固な勢力圏を築くことは在京活動でもプラスに働く面が多分にあつただろう。しかしその一方で、在京活動の経験の不足は、將軍や他の大名などと直接顔を合わす機会が乏しく、関係者との人脈を十分に構築できない、ひいては幕府内における発言力の低下などのマイナス面も生じさせることになった。土岐氏は当主の在京活動の不足という弱点を抱えており、その克服のため頼康は上洛後、御成の招待を積極的に行い、また同様の境遇にある細川頼之とも協力関係を築くなどして、幕府内での地位の向上を企図したのであろう。応安初期に頼康が幕府の重鎮となりえたのは、このような活動が非常に効果的であつたためだと考える。

第二章 土岐直氏の在京活動

前章では、当主頼康の在京活動について検討した。ここからは、頼康以外の土岐氏の関係者として、頼康の弟に当たる土岐直氏について見てゆきたい。

直氏は、貞治三年（一三六四）から同四年にかけて侍所頭人兼山城国守護に在職しており、こうした幕府内におけ

る立場はすでに明らかにされている。⁽²⁵⁾この直氏の在京について改めて確認する。『師守記』貞治三年四月二十九日条には、

廿九日、(中略)今朝鎌倉大納言義卿被_レ渡仁和寺等持院・贈左府陸座東院和尚・拈香放生等有_レ之云々、大樹乘_レ車、(直氏)
近習輩卅騎許、侍所土岐宮内少輔扈從云々、(懸下)

義詮が尊氏の七周忌法会のため等持院へ御成しており直氏もそれに供奉している。また同記の同年六月七日条には

七日、(中略)、今日祇園御輿迎如_レ例、(中略)
(頭書)今日大樹被_二見物_一云々、
(直氏)土岐宮内少輔_持構_マ浅敷云々、

とあり、義詮が祇園会へ御成した際に、見物のための棧敷を直氏が設営している。さらに、七月十日条には

十日、(中略)今夜子剋鎌倉大納言義詮卿、征夷大將軍、從二位、參内、(中略)次執事治部大輔義將、次侍所土岐宮内少輔等、執

事若党廿騎許、侍所若党十六・七騎有_レ之、

義詮の参内に際し、執事の斯波義将とともに、直氏も若党十六・七騎を率いて供奉しているのである。

以上、直氏に関して三つの徴証を確認した。そのうち二つに見られた、義詮の出向に際する直氏の供奉であるがこれは侍所頭人としてのものと考えられる。侍所頭人については、延文二年（一三五七）から嘉慶二年（一三八八）にかけて、足利一門・外様間わず有力大名家の当主以外の人物が頭人を務めたことが、羽下徳彦氏によって指摘されている。本稿で対象とした貞治年間から応安三年にかけては、管領の斯波氏では義種が、同じく一門の今川氏では了俊・仲秋兄弟が就任している。一方、非足利一門として土岐氏とほぼ同格であった佐々木京極氏では、佐々木導誉の嫡子であった高秀が務めている。斯波氏や今川氏などの足利一門は別にしても、土岐氏とほぼ同格である佐々木京極氏は嫡子が頭人となっているのに対し、土岐氏では舍弟である直氏が務めていることは注目される。

また、南北朝期における將軍の祇園會御成の際の棧敷設営については、担当者是一定していなかったことが、すでに二木氏により明らかにされている。⁽²⁸⁾より詳細に見てみると、在京大名家の人物が祇園會御成の棧敷を設営した場合、ほとんど担当がその役割を担っていたことがわかる。例外としては、貞治三年六月十四日に棧敷を設営した斯波

義将と先に見た土岐直氏のみであった。史料制約もあり事例が少ないという点は否めないが、これらの例外についても留意すべきではないだろうか。この二つの事例だが、斯波義将の場合は当時執事であり、さらに後見には実質的に幕政を主導していた父親の高経があつた。一方土岐直氏については、当主の頼康は在国しており、そのなかでの設営である。こうしてみると、土岐氏の在京活動において、直氏は嫡子ではなく舎弟であつたにもかかわらず、当主頼康と同等の役割を果たしていたのである。

さらに強調しておきたいのは、細川頼之が失脚した康暦の政変において、直氏が主犯格に挙げられていることである。⁽²⁹⁾この事実は、幕府内において直氏が政局をも動かしうる非常に強い影響力を有していたことを示している。その背景としては、これまで見てきた貞治年間の在京活動が想定できるだろう。

それでは、この特徴的な土岐直氏の立場をどのように理解すればよいのだろうか。ここで参考にしたのが田中大喜氏の研究である。⁽³⁰⁾同氏は、南北朝期に武士団の中で裁判権や軍事指揮権が嫡子（惣領）とその舎弟の双方に存在する事例が多数見られることから、両者が惣領権を共有する、兄弟惣領という構造を明らかにしている。この指摘を踏まえると、直氏の立場も、土岐氏の兄弟惣領としてのものとは考えられないだろうか。⁽³¹⁾直氏による棧敷の設営や將軍御成の供奉などを通して將軍への奉仕は、惣領の頼康が在国しているために果たせない役割を代わりに担うものであり、まさしく幕府への奉公を兄弟で分担していたといえるのではないか。土岐氏の在京活動の特徴として、このような兄弟惣領という当該期特有の構造が背景にあつたと考えられる。

はじめにでも触れたが、南北朝期では内乱のたびに守護は各地へ下国し、小康状態になれば彼らは上洛して在京の動きを見せる。そして応永年間に在京守護家は固定されるのであり、南北朝期はいわばそこに至るまでの過渡期であつた。当主が在国する場合、子弟の在京奉仕は不可欠である。こうして一族全体で在京活動を展開する動きが、当該期在京大名の特徴の一つであり、かつその活動の如何によって、幕府内での勢力争いにも影響がおよんだのではないか。実際、直氏は康暦の政変において、細川頼之排斥の首謀者とされるほどの存在感を見せたのである。

ただし土岐直氏については、頼康と同じく幕政に参与する在京大名の一人と見る見方も可能かもしれない。しかし土岐氏の場合は、頼康と直氏との上下関係がはっきりしている。尾張国を例にとってみると、頼康が守護で直氏は守護代である。さらに、直氏は頼康へ連絡する際、披露状を用いており、頼康と直氏の上下関係は明瞭である。このような点を踏まえると、少なくともこの段階における直氏と頼康を別々の在京大名とみなすことは難しい⁽³³⁾。

このように、直氏は舍弟でありながら、京において在京大名家の当主並みの役割を果たしていた。ただし、直氏は当主と全くの同格というわけではなく、あくまで当主の不在を補う活動を展開していたといえる。当主のみならず、舍弟も幕府要人としての活動を見せつつ、一族としてまとまりを保つこの土岐氏の体制は、他の大名家と比べても特徴的ではないかと考える。なお比較的近い事例として細川氏があげられる。同氏では、頼之期になってから一族の連合体制が築かれるが、頼之が管領職にある時期は、彼の弟で養子となっていた頼元による將軍出向の供奉などの在京活動が確認される。山田氏の示したような「観応擾乱期に在国して勢力を扶植し、複数にわたる分国を有す」という点に加え、土岐氏と細川氏には、こうした面からも共通性を見出すことができるだろう。

第三章 土岐氏における京都代官

前章で触れた直氏発給の披露状では、当主で守護の頼康が在国し、舍弟で守護代の直氏が在京するという一族配置のなかで、直氏は頼康に対し、守護代である自らを省き、遵行にあたる乙面と上条らへ直接文書を出すよう求めている。また土岐氏に折衝する際は、まず直氏に接触し、そのうえで当主頼康へ取り次がれることになっていたこともわかる⁽³⁵⁾。

これと似たような事例が貞治六年にも確認できる。『師守記』貞治六年六月十七日条には、

十七日、(中略) 今日午剋許、家君着^(中原師茂)衣冠^{常小煩}出仕給、(中略) 次令^レ向^レ北小路前中納言教光卿許^(武者小路)給、対面、数剋雑談、三屋保事被^レ談合、先年武家奉書被^レ見^レ之、以^レ此奉書、可^レ申^レ談土岐光禄^(頼康)入道之由返^レ答^レ之、とある。中原師茂が武者小路教光と対面し、尾張国三屋保のことについて相談し、「武家奉書」(引付頭人奉書であるう)を見せている。これに対して教光は、この奉書を論拠とし土岐頼康へ申し入れると返答している。

続いて同記の八月四日条を見ると、

四日、(中略) 今日北小路前中納言教光卿進^(武者小路)状於家君、是尾張国三家保事、口^レ入土岐伊予守直氏^二之処、此所拜^レ領恩賞、領家事、嘗不^レ存知^一、領家候者、不^レ可^レ有^レ相違^一之由令^レ申^レ之、且返報猷^レ之云々、如^レ予州返報^一者、三宅保領家職事不^レ存知^一候、相^レ尋代官^一無^レ相違^一者、不^レ可^レ有^レ子細^一之趣也、如^レ此奉^レ之条、悦存、可^レ參申入^一之旨、被^レ答^二返事^一了、

とある。武者小路教光が師茂に送った書状によると、教光が直氏に三宅保について口入したところ、当地は恩賞として拝領した土地であり、領家職については把握していなかったと直氏は主張した。さらに、代官に確認して領家職に間違いがなければ、中原家の知行は保障すると返報にあったことが記されている。

これらは、先の直氏披露状の事例と同様に考えられるのではないか。すなわち、教光は頼康に申し入れるといつても、実際に接触したのは直氏であった。貞治三年の際とは異なり、貞治六年には頼康も直氏も在京していたが、訴えがあった際の土岐氏の対応については、在京や在国の如何を問わず、直氏から頼康という順序が成立していたのであろう。

中原家と土岐氏では、三宅保をめぐるこのようなやり取りがあったわけだが、その端緒は貞治三年(一三六四)と思われる。以下、そこに見られる武井入道という人物について考察を加えていきたい。その存在は、これまで簡単に触れられてはいるものの本格的な言及はされていない。⁽³⁶⁾

次に掲げるのは武井入道の唯一の徴証である。同記の貞治三年八月十一日条には、

十一日、(中略)今朝善覚向^二土岐大膳大夫入道京都代官武井入道宿所^一、是近日美濃・尾張寺社本所領半済分可^レ

去之由、置^レ法云々、仍寮領美濃国玉村保并^二茈田保・穀倉院領尾張国三宅保等事、為^レ被^レ見^二文書^一也、而返事云、
國中法事、此一兩年押領事候、其事候也、多年押領地不^レ被^レ申^二引付奉書^一者、不^レ可^二道行^一云々、仍歸了、

とある。美濃国と尾張国の寺社本所領の半済分を返付するという決定を受け、雑掌の善覚が寮領美濃国玉村保、茈田保・穀倉院領尾張国三宅保等の半済分の知行回復のために向かったのが、頼康の京都代官武井入道の宿所であった。そして善覚はおそらく各所領の知行の根拠となる文書を提示して訴えたのであろう。しかし、武井入道はその場で「今回の半済返付はここ一・二年押領されている土地が対象なのであって、長年押領されている土地は対象に含まれず、これらの知行回復には引付頭人奉書がないとうまくいかないだろう」と返答し、善覚は立ち帰ることとなった。以上のことから、貞治三年には頼康の京都代官として武井入道という人物が在京していたことがわかる。

先に触れた土岐直氏は、この貞治三年時点では侍所頭人であった傍ら、頼康の分国である尾張国の守護代としても活動していた。すなわちこの時期の土岐氏の在京機構は、守護代とは別に、京都代官が置かれていたということになる。

それでは京都代官の職権とは、どのようなものであったのであろうか。史料制約はあるが可能な限り考察してみた。この史料の内容は、中原氏が美濃国と尾張国に有した諸司寮に関する交渉である。武井入道の職掌を考えるうえでこのことが鍵になるものと思われる。おそらく京都代官武井入道の役割は、土岐氏の窓口のようなものだったと考える。働きかけを行う当事者側の有していた人脈も考慮すべきではあるが、当主頼康不在のなか、土岐氏に交渉を持ち掛ける人々が最初にやり取りをする相手として設定されていたのが京都代官だったのではないか。それを裏付けるように、先の史料にある通り武井入道の返答を受けて、中原家は引付頭人奉書を用意し、本格的な交渉へ移っていたのである。

この南北朝期に「在京代官」、「在京雑掌」が置かれていた守護家について、先行研究で注目されているのは大内氏

である。大内氏関係の史料上に見える京都代官は、荘園の請負代官ではなく京都における大内氏の代官であること、また大内氏は分国支配にかかわる重要拠点に守護代とは別に代官を置き支配していたが、大内氏の在京雑掌は京都における代官だったと考えられている。⁽³⁷⁾ 上杉氏（山内上杉氏）についても、在京代官として判門田氏が応安年間より在京していたという指摘がある。⁽³⁸⁾ 大友氏や九州探題に就任した今川了俊や渋川氏なども、在京代官を置き幕府と連携をとっていた。⁽³⁹⁾ こうした事例を参考にすると、武井入道も荘園の請負代官ではなく、在国中の頼康の在京活動を代行する代官と考えられるであろう。その主な役割は分国の経営に関することだったのではないか。

このように大内氏、上杉氏、大友氏などの各守護家に見られる在京代官が土岐氏にも存在した点について、どのように考えればよいであろうか。山田氏によって示された、当該期の列島諸地域を三つの区分に分けてとらえる視角を参考としたい。⁽⁴⁰⁾ 同氏は、「遠江―越中―備中」あたりまでを「近国地域」ととらえ、東北・関東・九州を「遠国地域」、東は駿河・信濃・越後・飛騨、南は伊勢南部・伊賀・大和・紀伊、西は安芸・石見・周防・長門・伊予を「中間地域」としてまとめている。

まず九州は「遠国地域」であり、守護は基本的に在国するため京に代官を置いていた。大友氏は在京している場合もあるが、やはり土岐氏と同様にはとらえられない。山内上杉氏の場合は、主に「遠国地域」である関東に分国を有しており、関東管領として鎌倉府を構成するうえでの重要な一角を担う存在であったため、土岐氏と同様とみなすことはできない。もっとも土岐氏と近い存在は大内氏であろう。⁽⁴¹⁾ しかし大内氏にしてみても、分国は「中間地域」に当たる。そう考えると、「近国地域」に当てはまる美濃・尾張に分国を有する土岐氏が京都代官を置いていたということは、やはり注目すべきと考える。これは土岐氏が在京活動を分国経営の面からも重要視していたことのあらわれであろう。「近国地域」に分国を有する他の在京大名家には京都代官のような存在は確認されず、同じ在京大名のなかでも差異が生じているのである。

同時期の他の「近国地域」の在京大名家に京都代官が認められないにも関わらず土岐氏のみに見られる点について

は、当主頼康の在国期間の長さが理由だったのではない。ただ武井入道の徴証がわずかであり、頼康在京後には、武井入道の活動が見られなくなる点から、土岐氏の在京活動は当主の頼康がいれば代官を必ずしも必要としなかった可能性が高い。この点、当主大内義弘が上洛したのちも京都代官が在京活動を継続していた大内氏とも異なる形であろう。⁽⁴⁾やはり当主頼康の京都不在をいかに補うかは、土岐氏にとって権力基盤を維持するための重要な課題であったと考える。

おわりに

ここまで、当主頼康、舎弟直氏、そして京都代官の武井入道という人々を通して、貞治年間から応安三年までにかけての土岐氏の在京活動について見てきたが、史料制約から数少ない在京徴証に基づいた検討に終始せざるを得なかった。そのなかでも、当主の在国が長いという特別な状況に即した、土岐氏の特徴的な在京活動が明らかとなったのではない。すなわち土岐氏当主はもちろんのこと、舎弟や被官らも含めた在京活動を展開し、当主の不在を補う動きが見られた。本稿で明らかとなった点をまとめると以下の通りである。①公私にわたり將軍への奉仕を積極的に行い、將軍との親睦を深める。加えて將軍との関係性や御成挙行の実績を諸大名へ誇示する。②共通の弱点を抱える大名（細川氏）と協力して幕政運営に当たる。③分国経営にかかわる寺社本所側との交渉を行う。またこうした活動にどのような意図があったのかについては次のように考えた。すなわち、將軍との関係性を武器に、主に諸大名との関係性において政治的立場を確固たるものとし、幕政に参与する場での発言力を強め、さらに自己の勢力基盤（守護職や所領）を維持・拡大しようとしたのではない。今回、土岐氏という個別事例に着目したことで、山田氏が述べられていた、京都での政権参加を基盤として権力形成を志向した在京大名の活動についてより具体的に明らかとなっ

たと考える。

さらに注目されるのが、頼康はすでに軍事面で非常に貢献していたにもかかわらず、なおも幕府内での立場を維持するために在京活動を重視していた点である。頼康のみならずその他の一族や被官が、在京しどのような活動を展開するかが、幕府内における土岐氏の政治的立場を維持するために重要であったであろう。そしてそれは、同じ境遇にあったと思われる細川氏などの事例から、在京大名共通の課題とみなすことができるのではないか。在国し幕府方として軍忠を重ねつつ軍事力を蓄えることが、在京活動にもプラスに働いたことは当然であるが、それだけでは決して幕府内での政治的立場が安泰となるわけではない。やはり在京活動をいかに展開するか、將軍との関係性の構築や諸大名への誇示などを行い、いかに幕府内での立場を維持するかが、当該期在京大名に共通する課題であったといえよう。

ただそうした課題がどれほどの深刻さで生じてくるかは、各大名家の置かれた状況により異なってくる。だからこそ他に比べて当主の在国期間が長かった土岐氏は、ここまで特徴的な在京活動がなされたのである。そうして展開された在京活動は、幕府内における在京大名の政治的立場の強弱を分ける大きな要因の一つとなったのではないか。土岐氏については、当主頼康を頂点とし、舎弟や被官の力を結集して在京活動を展開するという強固な一族体制が明らかとなった。それがいかに効果的であったかは、応安年間前半における幕府内での頼康の権勢や、康暦の政変で細川頼之排斥を主導した直氏の動きなどを見れば明らかであろう。こうした大名家ごとの差異というのも、在京大名について考える際には重要であると考ええる。

本稿は土岐氏という個別事例について、時期を限定し限られた史料から考察したに過ぎず、室町期にかけて在京大名が固定化していく過程を十分に説明するには至っていない。また今回新たに明らかとなった近国地域に分国を有する在京大名のそれぞれの差異について留意しつつ、他の大名家を含めた在京活動の実態を明らかにすることも必要な作業である。あわせて今後の課題としたい。

- (1) 石母田正『中世的世界の形成』（伊藤書店、一九四六年）、佐藤進一「守護領国制の展開」（『新日本史大系』三、一九五四年）、永原慶二「守護領国制の展開」（『社会経済史学』十七―四、一九五一年）など。
- (2) 川岡勉『室町幕府と守護権力』（吉川弘文館、二〇〇二年）。
- (3) 吉田賢司『室町幕府軍制の構造と展開』（吉川弘文館、二〇一〇年）。末柄豊氏も、幕政とのかかわりにおいては大名、地方とのかかわりにおいては守護としてとらえるべきとされる（同「大名は任国ではなく京で幕政に関与した」『週刊 新発見！日本の歴史 二四号 室町時代三 応仁・文明の混迷と戦乱』（朝日新聞出版、二〇一三年））。
- (4) 山田徹「南北朝期の守護在京」（『日本史研究』五三四号、二〇〇七年）。
- (5) 佐藤進一『日本の歴史九 南北朝の動乱』（中央公論社、一九六五年）、小川信『細川頼之』（吉川弘文館、一九七二年）。
- (6) 小川信『足利一門守護発展史の研究』（吉川弘文館、一九八〇年）。
- (7) 谷口研語『美濃・土岐一族』（新人物往来社、一九九七年）、多田誠「南北朝期の土岐氏一族支配について」（『皇学館論叢』二八号―一号、一九九五年）、「南北朝期の土岐氏守護代について」（『岐阜史学』九二号、一九九七年）、小原嘉記「都鄙往還の政治学」（元木泰雄編『日本中世の政治と制度』（吉川弘文館、二〇二〇年））など。
- (8) 山田徹「土岐頼康と応安の政変」（『日本歴史』七六九号、二〇一二年、以下山田a）、松島周一「観応の擾乱と東海地域」（『年報中世史研究』三八号、二〇一三年、以下松島a）、山田徹「南北朝後期における室町幕府政治史の再検討（中）―康暦の政変以後の政治過程と細川氏・山名氏・土岐氏―」（『文化学年報』六七号、二〇一八年、以下山田b）、松島周一「土岐頼康と斯波義将―尾張・三河からみた室町幕府―」（『歴史研究』二二二号、二〇一九年、以下松島b）、木下聡「土岐頼康―美濃・尾張・伊勢を押さえる東海の雄」（亀田俊和・杉山一弥編『南北朝武将列伝 北朝編』（戎光祥出版、二〇二二年））。

- (9) 羽下徳彦「室町幕府侍所頭人付、山城守護補任治革考証稿」(『東洋大学紀要』文学部篇一六号、一九六二年、以下羽下a)、羽下徳彦「室町幕府侍所考」(『論集日本歴史五 室町政権』有精堂出版、一九七五年、初出一九六三年、以下羽下b)、谷口研語前掲書(7)、山田徹前掲論文(4)など。
- (10) 他には、松島周一前掲論文(8)bにて、土岐直氏の尾張国守護代としての活動について触れられている。
- (11) 土岐氏の当主である頼康は、観応の擾乱が勃発すると、主に東海地方で軍事的必要性が生じたことにより、分国の美濃国や尾張国の他、摂津国などへも転戦した。恒常的な在京が始まったのは、貞治六年(一三六七)からである。貞治年間に守護の在京が定着しだすことから考えると、頼康の恒常的在京の開始は遅かったといえる。土岐氏は当主の在京期間が他と比べ短いという、特殊な事情を有していたのである。したがって、土岐氏の在京活動の実態も、おのずと他と異なるものとなってくるだろう。
- (12) 応安三年(一三七〇)の頼康下国は細川頼之との対立の末のものと評価されており、そうした政治的要因からか頼康は康暦年間に至るまで京から遠ざかる(山田徹前掲論文(4)、(8)bなど)。したがって、検討時期の下限は応安三年とすべきと判断した。
- (13) 山田徹前掲論文(4)。
- (14) 山田徹前掲論文(8)b、松島周一前掲論文(8)a。
- (15) 『師守記』貞治六年(一三六七)五月二十四日条。
- (16) 二木謙一『中世武家儀礼の研究』(吉川弘文館、一九八五年)二〇頁。
- (17) 浜口誠至『在京大名細川京兆家の政治史的研究』(思文閣出版、二〇一四年)八六―八八頁。
- (18) 『師守記』貞治三年(一三六四)五月三日条。
- (19) 『太平記』卷三十九「大内介降参武家事」。
- (20) 『師守記』貞治六年(一三六七)九月七日程によると、頼之は七日に上洛したようである。

(21) 山田徹前掲論文(8) a。
(22) 同右。

(23) 山田氏も、「南北朝後期における室町幕府政治史の再検討(上)」―康暦の政変以前の「斯波派」・「細川派」をめぐる―(『文化学年報』六七号、二〇一七年)にて、「細川派」といえるほど関係が深かったかどうかは不明だが、ともかくも当初の彼は、義詮没後の幕府政治のなかで、頼之と共同で幕政を運営することが期待されていたものと思われる」と両者の関係を示唆しているが、この『後愚昧記』の徴証から、両者の協力関係をより積極的に裏付けられないだろうか。なお後になって頼之は結局山門の要求をのむが、山田氏はおそらくこの段階から頼康と頼之の折り合いが悪くなりはじめ、皇位継承問題で決定的対立に至ったと述べている。当初は明確に両者の協力関係があったとすれば、頼之の山門への妥協は、頼康から見れば自分との協力関係に対する背信行為として映ったのではないか。

(24) 山田徹前掲論文(8) b。

(25) 羽下徳彦前掲論文(9) a、同上 b、谷口研語前掲書(7)、山田徹前掲論文(4)。

(26) 羽下徳彦前掲論文(9) b。

(27) 同右。

(28) 二本謙一前掲書(16)。

(29) 『後愚昧記』康暦元年(一二七九)閏四月十四日条に、「佐々木大膳大夫高秀并土岐伊予入道(直氏)以下一揆衆所行也」とある。

(30) 田中大喜「南北朝期武家の兄弟たち―「家督制」成立過程に関する一考察―」(『中世武士団構造の研究』校倉書房、二〇一一年、初出二〇〇五年)。

(31) 本稿の趣旨である在京活動とは離れるが、谷口研語前掲書(7)で指摘がある、直氏が独自の軍事的基盤を有してい

たという点も、同様に理解できるのではないか。

(32)『東寺執行日記』貞治二年（一三六三）八月十日条（『愛知県史』資料編九中世二）。

(33)浜口誠至前掲書(17)二九頁では、戦国期在京大名の定義について、「当主が在国して嫡子が在京している場合、嫡子は大名として含めた」としている。参考になる見解であるが、本稿における直氏は当主の舎弟であるし、やはりこの時期の直氏を在京大名とみなしてよいかどうかは慎重を期す必要があるのではないか。

(34)小川信前掲書(5)、(6)。

(35)松島周一前掲論文(8)bでは、直氏発給の披露状について、訴人である東寺側は土岐氏との交渉ルートを有していなかったため、まずは守護代の直氏へ話を持ち込んだと述べられている。また、のちに再度遵行を東寺側から求められた際に、直氏は論人が頼康の配下であるために自分の命令は聞かないだろうと返答し、頼康へ対応を求めたことも指摘されている。

(36)山田徹前掲論文(8)a。

(37)萩原大輔「中世後期大内氏の在京雑掌」、『日本歴史』七八六号、二〇一三年。

(38)湯山学「山内上杉氏の在京代官判門田氏」、『湯山学中世史論集一 関東上杉氏の研究』岩田書院、二〇〇九年、初出一九八六年。

(39)山田貴司「大友氏の在京代官・在京雑掌」、『戦国期大友氏の館と権力』吉川弘文館、二〇一八年。

(40)山田徹「室町領主社会の形成と武家勢力」、『ヒストリア』二三三号、二〇一〇年、「室町時代の支配体制と列島諸地域」、『日本史研究』六三一号、二〇一五年。

(41)一色氏は、明德年間には在国守護代とは別に在京守護代がおかれていたと思われる徴証が指摘されている（河村昭一『南北朝・室町期一色氏の権力構造』（戎光祥出版、二〇一六年）。しかし、当主一色詮範は在京しているので、当主が在国している状況を補うために代官を置いた土岐氏の特徴はやはり変わらないであろう。

(42) 萩原大輔前掲論文(37)、田村杏士郎「大内氏家臣平井道助考」(『七隈史学』一七号、二〇一五年)。